



流浪人研究者のつぶやき

「武士たるもの七度主君を変えねば武士とは言えぬ」
——津藩の藩主であった藤堂高虎の言葉です。読者諸兄姉のほとんどの皆様はお初にお目にかかります。東京大学生産技術研究所の南豪と申します。漢字二文字なので、署名でフルネームを書いても「きちんと下の名前も書いて下さい」とたまに注意を受けますが、これでフルネームですので、どうぞお見知りおきいただけますと幸いです。縁あって産業技術総合研究所（産総研）の富田俊介博士よりバトンを引き継ぎまして、僭越ながら本コーナーに寄稿させていただくこととなりました。

さて自己紹介をさせていただきますと、私は分析化学の研究室出身ではなく、有機合成化学分野の研究室で修士、修士および博士を取得しております。そして有機化学や分析化学ではなく電子デバイス開発が専門の研究室を経て、現在は超分子デザインの研究室を主宰しております……これだけを傍から見ると、なぜこのような人物が日本分析化学会に所属し、ぶんせきに寄稿しているのか謎になりますが、順を追って説明させていただければと存じます。

私と分析化学の出会いは、実は先の有機合成化学よりも古く、高校生時代に遡ります。当時、化学部に所属しておりました私はザルツマン試薬を用いて自動車排ガス中の NO_2 の検出をおこなっておりました。大学の研究と比べて科学教育の範疇を超えないものではありませんでしたが、「何かを分析すること」に対する興味はこのときに培われたように思われます。その後、埼玉大学工学部応用化学科に進学し、研究室配属決めの時には、「高校時代とは違う分野を選んでみよう」と考え、有機合成化学の研究室の門を叩きました。超分子化学がご専門である久保由治先生（1人目の師）に師事し、人工レセプターや半導体材料などの新しく分子を創製する楽しみをここで学びました。そして在学中に英国留学する機会に恵まれ、ポロン酸を用いた糖センサー開発でご著名なバース大学のTony D. James先生（2人目の師）のもとで、自己組織化材料の開発に携わりました。修士学生であった私は非常に拙い英語力で、喫茶店でコーヒーを頼んでコーラが出てくるという目も当てられないレベルでしたが、海外で研究をすると様々な人との触れ合いがあって視野が広がるということを学びました。

その後、研究室の移転に伴い、博士課程は研究活動を首都大学東京大学院都市環境科学研究科環境調和・材料化学専攻に移しました。研究室の立ち上げ、そして国内でも大学間でカラーの違いがあるというのを実感できた

この経験も、私の今の研究活動に活かされていると思われれます。学位取得後、「欧州は行ったので北米で研究をやってみよう」と考えた私は、米国ポーリンググリーン大学のPavel Anzenbacher, Jr.先生（3人目の師）のもとで博士研究員をおこなうこととしました。ここではケモトリックスを用い、得られたデータを多変量解析することで、多成分を同時に分析するという手法を勉強しました。頭の回転が悪いのをカバーすべく、巨人の星よろしく気合と根性の実験量でこれまで乗り切ってきた私にとって、当該解析を理解・使いこなすのは知恵熱が発生する難易度でしたが、このときに出した論文を富田さんが読んでくださったことが今回のきっかけにもなり、頑張っただけよかったと思っております。

そして、これまでのバックグラウンドを活かしつつも、やはり違う分野の研究をしてみようとの考えに至り、よりデバイス色の強い、とりわけ電子デバイスの研究をしたいと思うようになりました。その折、運よく山形大学時任研究室の助教として着任することができました。時任静士先生（4人目の師）は印刷型有機電界効果トランジスタに基づく電子デバイス開発がご専門であるため、着任時は電子回路図を眺めてもチンプンカンプンでしたが、埼玉工業大学の丹羽 修先生や、産総研の脇田慎一博士、栗田僚二博士のご助力を得ることで（このときに日本分析化学会に入会）、有機トランジスタ型センサーデバイスの開発をどうにか軌道に乗せることができたかなと考えております。そしてこの4月に独立して研究室の運営を始め、慌しく動いております。

冒頭の藤堂高虎ではありませんが、師、場所、国、そして研究分野を変えてもなお業績を挙げることができれば、研究者として生きていくのに申し分ない人物と言えるのではないかと考えており、私自身がそのような人物であるかどうかを見極めている真っ只中におります。今まで3か国、五つの大学で4人の先生と研究をさせていただきました流浪人生活は、32歳で研究室を主宰することとなった自分の学者としての立ち位置を確立するのにきっと役立つものと考えています。「こういう生き方もあるのだな」と、私のつぶやきが学生さんの将来設計に少しでも参考になれば幸いです。

さて、次号は東北大学の鈴木（旧姓：升谷）敦子先生に、無理を言ってお願い致しました。ご快諾いただき、誠にありがとうございました。次号のリレーエッセイを拝読できるのを楽しみにお待ちしております。

〔東京大学生産技術研究所 南 豪〕